

ひととき

宮本百合子

青空文庫

はるかな森の梢に波立つて居るうす紅い夕栄の雲を見入りながら、私は花園の入口の柱によりかかつて居る。

何となく朝から霧の晴れ切れない様な日だつたので、非常に静寂な夕暮である。

うす青い様な空氣の中に素早い動作で游いで居るトンボと蝙蝠の幾匹かは、一層高いところを、東へ東へと行く白鳥の灰色の影の下に如何にも微妙な運動をしめして居る。

つめたい風が渡つて居そうに暗い木陰に、忘られた西洋葵の焰の様な花と、高々と聳え立つて居る青桐の葉の黄金の網とが、眠りに落ち様とする沈んだ重い種々の者を目さめるまでに引きたてて、まだ虫の音のまばらな、ひると、よるとのとけ合つた一時を、思い深げに飾つて居る。

くつろいだ心地になつて、私は持つて居た本の背をやさしくなでながら、斯う云う時に有り勝な、沈ついたどつちかと云え巴しみのこもつた氣持で、はてしなくいろいろの事を思いふけつた。

永い間例え折々は氣まずい思いをしあつても、自分の友達の一人として居たまだ若い人

が廻復の望がないと云われた病にかかるときいてからはいつもいつもその事ばかりが思われてならない。

額の広い、健な時はきれいだとは云われなかつたその人がこの頃はああ云う病氣特有のすき透るほど白い肌になつて見違えるほどなよやかに美くしなつたとか、西洋人形の様に大きい眼に涙を一杯ためて居たとか云う事を、前から私より親しくして居た人々からきくと、ついつい涙を抑えられなくなつてしまふ。

何と云う痛ましい事かと思うと、彼の人の大まかな、おつとりした物ごしが一々目に見えて来る。

根気が強くて、どんな細かい事でもコツコツとやつて居た。

何だか生え際の薄い様な人であつたがなどとも思われる。

低いどつちかと云えば鼻に掛つた声で、堪らなく可笑しい時には、上半身を後の方にのばして高笑をする様子が何だか中年の男の様な感じを与えたので、私はその人の笑声がするに注意して見て、面白いなと思つて居たものだ。

二十近くまで育つて、頭の中も漸々まとまりかけ、体も熟して来た今になつて、近い内に、そのすべてがこの地上から消滅して仕舞うのだと思うと、人々の記憶に残るほどの

仕事も、短い年月の一生に仕あげられなかつた彼の人の氣持を察しないわけには行かない。

神田の病院で、彼の人は何を思つて居る事だろう。

私が若し今、そう云う境遇になつて、死の宣告まで与えられたら、自然にその日が来るのを待ちつづけて居るほどの勇悍な心はない。

はげしい生の執着に悩んだ揚句は、氣でも違つてしまふだろう。
あきらめがないと云われても仕方がない。

意氣地がないとけなされもしようけれども、自分の一生の仕事を心嬉しく定めて、日々務めて居る。この希望の多い、栄ある一生を、どうしてそう素氣なく思い切れよう。

私が四十代にでもなつたらどうかは知らないけれども、今の斯う云う氣持は^{いつわ}詐られない。

彼の人がそんな悲しい日を送つて居るときいた十日程後、私は到々思い切つて手紙を書いた。

雨が静かに降つて居た。

家人から遠ざかつた私の書斎は夕飯時でさえやかましくない程なのに、更けた夜の淋しいおだやかさと、荒れた土の肌をうるおおして行く雨のしとやかさが、私の本箱だらけの狭い部屋に満ち満ちて、着て居る薄い袷衣も、髪の毛も皆心に添うた様な晩であつた。

机の広い面に両手を這わせて、じいつとして居ると、いつの間にか、今紀州に居る歌人の安永さんの事を思い出した。

それにつれて、種々の事が頭を通りすぎた中にどうしても私に、あの人へのたよりを書かせすには置かない様な事があつた。

早い春の暮方、その頃歌をやつて居た私共六七人のものは、学校の裏の草の厚い様な所に安永さんを中心円く座つて、てんでに詠草の見っこをして居た。

その時、私の櫻の木の歌の中に「空にひに入る」と云う言葉があつたのを、「私にはあんまり強すぎる言葉なんです。

どんなにつとめても、斯う云うのは私に出来ません。

ほんとうに弱いんですね、体も心も。

と云つて、自分が沼津に居た時の歌だと云つて、熱にうかされる様になつて昼間火鉢によりかかつて目をつぶるといつでも好きな夢を見られる嬉しさをうたつた歌を誦して聞かせた。

細い細いこの上ない感傷的な調子で、体をゆーらり、ゆーらりと、前後にゆすつて歌う安永さんの様子は皆の心を物柔かな悲しさに導いて行つた。

私の左向うに座して、私の詠草を見たまま身動きもしずに下を見つめて居たあの人の様がその時どんなに淋しそうに見えたろう。

考えて見れば、自分と同じ病の人の歌の気持は、私共に想像出来ないほど他の人の心を打つたに違いない。その様子が、どうしても追う事の出来ない様に私の目先にチラツいた。

そして、私は、涙をためながらあの人にたよりを書いたのであつた。

奇麗な白い紙に、細い平仮名ばかりのやさしい「ふみ」であつた。

何としても、あの人の病を私が明かに知つて居る様な事を云えなかつたので只心に浮ぶままを書きつらねて行つた。小さい私の部屋の隅から隅までより倍もながかつた。

じいつと、柱にもたれて、次第次第に黒ずんで来る森を見て居ると、その中の文句がきれぎれに思い出される。

いつもいつもゆうぐれにさえなりますれば、私の心にタバえのくもの様にさまざまないろとすがたのおもい出がわきますなかの一つが、とうとうこうやつてふでをとらせたのでござります。

思いがけないあの長い長い私の手紙をうけとつて、彼の人はどんなに妙に思つた事だろう。

私は、床の上に起きあがつて封書を持ったまましばらくは私からと云う事をうたがつて、やがて私の癖の多いのたくつた様な字を見きわめてから一方のはじをきるに違ひない。

何事でも用心深くやつて行くあの人の気だてが出て来るのであろう。

あの時、この後も御たよりをさしあげるのを御許し下さいと云いながら何となしせわしさにとりまぎれて一度もあげなかつたけれどもどうだろう。

私の筆不性から、又あの人の氣まぐれだろうと思われてしまふ事は辛い事である。

彼の人が斯う云う病気になつた時は、私が丁度遺伝と云う事に何となし心を引かれて居た時だつたので非常に悲痛な適例を見せられた気がした。

今更恐ろしさに身震をせずには居られなかつた。

自分の慰安を得るために、未来はてしなく産れ出づべき子孫の者共の辛痛を思わずには無責任に家庭を作ると云う事が明かな罪惡である事を思わされる。

人間は病苦と淋しさに堪え得る強い心がないのであろうか。

それ等の涙の種を忘れ得る専心の仕事を得られないものであろうか。

斯う思うにつけ、知人の一人でまだ若い人が自分の病苦を未知な子孫に与えるのに忍びないと云つて、孤独の一生を送る決心をして居るのを尊まずには居られない。

真に幸福な事には私の体には何の濁つた血液も流れ入つて居らず健な心臓と頭を持つて生活して行けるので私の周囲に起つて来るそう云うみじめな事柄を見ききすると實にたまらない様になつて来る。

「幽靈」のオスワルド・アルヴィングが受けたと同じ深さの苦惱が彼の人の胸の中にも横わつて居るのである。只その苦惱が外に現れたのと、劇しい争を眼に見えぬ心の中でして居るとの違いがあるばかりである。

或る種の病の様にその生命が危険になつた時には既に意識を失つて居ると云うのなら幾分苦痛をのがれる事も出来様けれど、最後の一息を吐く瞬間まで明かにすぎる頭のままでなやまなければならぬ氣持を私は心から同情するのである。

私はその人達の親をせめるのである。

親がその子と云う血肉の分れたものを此上なく愛すると云うのなら、何故、樂しかるべき世の幾段かの階をふませた後に生を奪うみじめさを思はないのであろう。何故始めから、今日こぼすいとおしみの涙をこぼして、静かに安らかな未来の国の子供となし得なかつたのであらうぞ。

私は、親となつた人達の無責任さを、その罪の淨むべくもあらず深いのを力の有らん限

りせめたいのである。子孫を産み養い育てる事は人としての義務ではあるとして、箇々の人にとってはそれが必しもその人に対する最も適切な義務ではない事があるのを思わねばならないではなかろうか。

私は重くなつた様な頭をあげてほの暖い夕闇のあたりをながめた。

青空文庫情報

底本：「宮本百合子全集 第三十巻」新日本出版社

1986（昭和61）年3月20日初版発行

※1915（大正4）年9月8日執筆の習作です。

入力：柴田卓治

校正：土屋隆

2008年2月28日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) に作られました。入力、校正、制作にあたつたのは、ボランティアの皆さんです。

ひとつき

宮本百合子

2020年 7月17日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>